



徳永 直文学碑を建立しよう!

映画と講演の夕べ

時…十一月一日(月)午後五時半

所…熊本県立図書館ホール

映画「太陽のない街」

講師 作家・詩と眞実同人

文芸評論家・「文化評論」前編集長

吉良 敏雄
津田 孝

会員券
¥ **1,000**

徳永 直 短篇選集

〔収録作品〕

最初の記憶・他人の中・あまり者
黒い輪・冬枯れ・八年制・彼岸

文庫本型 三〇〇頁
予 価 五〇〇円
発 刊 十月下旬

徳永 直研究会編

「徳永 直研究」誌

創刊号・発刊十月初旬

徳永直文学碑

すまきに寄せて

(一)

| | |
|-------|-------|
| 首藤 基澄 | 久保田義夫 |
| 蔵原 惟人 | 中村 青史 |
| 吉良 敏雄 | 森塚 利徳 |
| 安永信一郎 | 武藤 光麿 |
| 津田 孝 | 木下 嵩 |
| 島田 四郎 | 藤川 治水 |
| 近藤 進 | 緒方 求也 |
| 永松 定 | 高光 義明 |

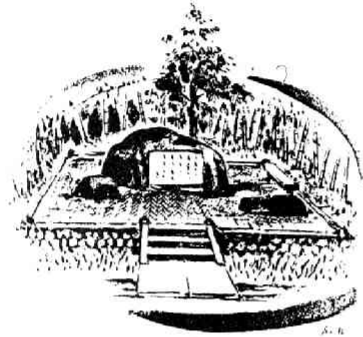
碑文

撰文 蔵原 惟人氏

私たちはもつと労働について語らなければならぬ。労働のもつ内容は、現在語られている多くの恋愛よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、乃至は消費生活の絢爛さよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである。

「最初の記憶」

(一九三八、八)より



見取図
画家 宮崎 静夫氏

要 項

- 一、 建立場所 熊本市立田山登山口
- 一、 完成予定 一九七七年一月
- 一、 募金総額 五百万円
- 一、 応募額 一口、千円とします。
職場、サークル、民主団体、
会合等の大衆募金はこの限り
でありません。

一、 送り先

一つの起爆剤に

首 藤 基 澄

作家の出身地やゆかりの地では、文学史上の位置づけとは別に、必要以上に話題にされ、ありがたがられる者がいるかと思うと、すぐれた作品を残し、重要な役割を果たしたにもかかわらず、一般には無視され、正当に受け入れられない者がいたりする。熊本における徳永直は、どうやら後者に近い存在だった。旧知の人や、一部の識者の「有益な言葉」が、十分に根づかなかつたように私には思われる。

徳永直の昭和文学史上の位置は、プロレタリア文学を無視しないかぎり、不滅である。ところが、残念なこと、われわれはまだその全貌を捉えることができないでいる。いくつかの条件が悪く作用して、全集すらいまだに刊行されていないのである。

われわれは徳永直の全体像を把握すべく、微力ながら研究会を持続していかねばならないが、このたびの文学碑建立が、一つの起爆剤になって、正当に理解され、止揚されていくようにと、今は念じている。

(徳永直研究会主宰・熊本大学教授)

徳永 直文学碑の建設をよろこぶ

蔵原 惟人

徳永直が一九二九年に書いた小説「太陽のない街」は、近代的な工場労働者の生活と左翼的な労働組合のたたかいのなかから生れたわが国で最初の文学的な作品として、小林多喜二の「一九二八年三月一日」「蟹工船」などとともに、戦前のプロレタリア文学に新しい時期をもたらしました。

彼は貧しい農家に生れ育ち、小学校も卒えない頃から働きに出され、職業を転々としたあと、印刷工として労働運動に参加するなかで、ゴリキーなどに学びながら、思想的、文学的な修業を積みかさね、最後の長篇「静かなる山々」にいたる多くのすぐれた作品によって日本の近代文学史に特異な足跡を残しました。

こんど徳永直の文学碑を彼の出身地である熊本に建てようとする計画が地元の有志たちを中心にするめられて、いるというのを聞いて、私は彼の古くからの友人のひとりとして、また熊本にゆかりのあるものとして、たいへんうれしく思っています。

(日本共産党中央委員会常任幹部会委員)

偶然ということと徳永さん

吉 良 敏 雄

二十年五月の空襲によって丸焼けした黒髪小学校に、まさか徳永さんの卒業台帳が残っているとは思わなかったが、事実そこで発見された。

その台帳の住所番地をよりどころにして、徳永さんの成長の家を捜して、熊本市三軒町といわれるあたりをうろついていると、

「直どんなら、うちに奉公しておらしたつすばい」というお婆ちゃんが現れた。三軒町カッパ橋の近くの若宮陶器屋とその隣のタバコ屋のお婆ちゃん若宮さんである。

この婆ちゃんが、徳永さんの作品「他人の中」に出てくる米屋の若奥さんであったし、女学校に通っていたその家のむすめさんは、もう亡くなったという。その奉公先の米屋もこの家の前にあった銀杏の木も、ほど近いところにある。惊天神に通う道路上、水村指圧院が徳永さん成長の家だという。

十五年ばかり前の話であるが、若宮さんの婆ちゃんはもう亡くなっている。

(作家・熊本県議会議員)

徳永直のこと

安永 信一郎

大正十年秋の暮れ、安己橋の私の家に熊本短歌会に入りたいということ、角田泡果と二人で訪ねて来た。まだ若い少年達であった。そして希望通り、当時の公会堂四号の熊本短歌会にやって来た。その時の直の歌は「まずおのズボンに手を突っこんで落日」というのであった。字たらずもひどいもので短歌というわけにはゆかぬが、新感覚派の自由律歌ともいうべきものであるが、なかなかいい感覚のものであった。当時、印刷所の機な所に仕事をもっているらしい人の歌だと思った。あとでまけば黒髪あたりに住んでいた由、その時切りで、歌会には二度とあらわれなかった。

「太閤のない街」が世に出た時、特別の感慨があったわけだ。昭和に入ってからにはもう板についた筆致をもつ作家になっていた様だ。

その頃、「働く婦人」という雑誌が送って来た。それには直の住所が書いてあったが、その後送って来るものには住所が書いてない。それも運動の上の何かの事情であったのだろう。その後も、本屋の店頭に並べてくれという意味あいであったのだろう。然し当時発売禁止のものばかりであったので、店に出すわけにはゆかなかったことを覚えている。

私は徳永氏の様な尖鋭な思想とは相いいれぬ立場であったが、彼の文学者としての才能は見事だと思ひ、若

くはじめてあった時の才気の程がつかしいのである。なつかしさはまた、その頃のプロレタリア短歌の拍頭韻であったので、さきにあげた直の歌も、別段不思議なものとも思わなかったのであるが、直自身は歌会の雰囲気にも興味を感じたであろう。多くのこの土地の作家たちが大なり小なりそのはじめに歌会をのぞいてみるのが面白いと思う。

(歌人・熊本県近代文化功労者)

徳永さんのこと

津田 孝

徳永直さんと私が知り合うようになったのは、一九五三年ごろのことである。したがって、身近に知っていると言っても、なくなるまでの五年ほどということになる。

苦しい五年間であったと思う。徳永さんが生涯を打込んでいた民主主義文学運動は、深い亀裂を経験した時期であった。その後遺症もなかなか癒やされることのなかった、そういう時代であった。

徳永さんのこの問題への対処は、誤り多いものであったかもしれないが、ごまかしのないものだった。徳永さんが悪戦苦闘のうちに生涯を閉じたとき、私はその無念さ思った。しかしいまは、それも徳永さんらしいと誇れるようになっていく。

二十年の歳月が流れ、徳永さんがつねに心のやすらぎを求めてやまなかった生地に、やがて文学碑が立つ。勳

く人々の心に深く寄り添った徳水直の文学は、これを機会にあらためて見直されることになるだろう。

(女孀、文芸評論家、新日本出版社編集長)

兄たちとのこと

島田四郎

「徳水直年譜」をみると明治三十二年生れ、四十五年十三歳で九州日日新聞社の植字部に文選工として入るとあるから私の三番目の兄(岡末吉)と全く同じである。少しおくれて私の従兄二人もその仕事についた。「ささやき」という回覧誌は私も小学四、五年ころから兄が家にもって帰るのを読ませてもらった。牧野香月、角田狂風、いとこの黒木芳舟、それに兄たちが短文や詩、歌、などを書いていた。徳水直の名もその中に入ったはずである。

大正八年、私が小学校を卒業する直前に兄が肺病で死んだ。二人のいとも数年後に死んだ。私を可愛がってくれた、短歌のうまい牧野さんは東京で死んだ。みな結核であった。

ちなみに大正六年熊本市役所発行の市誌によると当時の新聞社(職工)の賃金は日給で男五十銭、女二十二銭とある。私の長兄が明治三十二年に同じ職場でもらった初めての日給は四銭であったという。

(熊本日日新聞社長)

近藤 進

若い頃「太陽のない街」を読んで深い感銘を受けたことを記憶しています。

労働運動を始めたばかりの頃でしたが、多くの示唆と大きな勇気を与えられました。

文学碑の建立を契機に、徳水文学の真髓が多くの労働者に理解され浸透していくことを期待しています。

(熊本県労働組合総評議会議長)

作家 徳永 直

永松 定

昭和初年から昭和十年ごろまで約十年間、プロレタリア文学が日本文壇を席捲した感があったが、今ひるがえってみると、あれほど隆盛を極めた左翼文学に於て、個々の作品についてみると、案外読みごたえのあるものは少いようである。その中において徳水直の「太陽のない街」その他の作品などは、最も優れたもののひとつである。

左翼作家には、プロレタリア出身でなく、林房雄、小林多喜二などインテリ出の作家も多かったが、徳水直は

貧乏(?)の子であった点でも、いわゆる生え抜きのプロレタリアであったが、左翼的イデオロギーが表面に露出することなく、その素朴な人柄と同じく作品に於ても、庶民的な臭いが濃厚であったことは、私などには却って一層の親しみが持てる作家である。

(作家 梅光学院女子大学大学院教授)

人間らしさの魅力

久保田 義 夫

わたしは徳永直氏とは一面識もなく、青年時代その作品を読んで影響を受けたこともない。氏が思想的に苦しんでいた昭和八、九年ごろは中学生で、今はきびしい軍事教練や配属将校の武勇伝を思いおこすばかりだ。わたしたちより五つほど年上の人にはマルクス体験というのがあるようだが、わたしは思想的真空時代に育った。それでも、小学校の先生が赤たといわれて警察に引張られたのを覚えてるし、従兄が持っていた文芸戦線や金子洋文、前田河広一郎、藤森成吉といった人の作品集をよんだ。徳永直氏のもののはなかった。

近ごろ氏のことを読み始めたのは、言わば自分に欠落したものを読むということであつたらう。読み始めてみると、いろいろな批評が氏の周辺にあることを知った。もともと一読者として読書感想文を書くことが、わたしの身に合った目標であると考えていたが、そういう批評を避けて通るわけにもいかず、そうしたものと付合っているうちに、いろいろ批判される点こそ氏の美質だと思ふようになった。氏には強さもあれば、弱さもあつた。

それも誠実さゆえであつたと思うが、わたしはその弱さが好きだ。それに熊本県人、主として県出身の文学者には合理を越えた人間臭さがあるようで、氏もまたその系譜に属するのではないかと思う。その点にも興味を覚えるのである。

(徳永直研究者・第一高等学校教諭)

近代熊本における郷土文学の借物と本物

中 村 青 史

近代の熊本は、もともと文学的雰囲気には乏しい処のようだ。にもかゝらず、近代文学史上に「熊本」の名はよく出る方であらう。

明治二十年創立の第五高等学校は、二十四年から二十七年のラフカディオ・ハーン(小泉八雲)、二十九年から三十三年の夏目漱石、三十六年から三十九年の厨川白村といった教師たち、寺田寅彦、林圀雄、上林曉らの学生たちと近代文学史上の有名人を熊本の地に数年間滞在せしめた。しかも彼等は熊本を舞台とした作品を書いた。その他、森鷗外が「阿部一族」を、芥川龍之介が「糸女覚書」を書き、与謝野鉄幹、北原白秋、吉井勇、平野万里、木下幸太郎の天章探訪と、そこから生まれた白秋の「邪宗門」、阿蘇に遊んだ三好達治の「草千里」、近頃ブームの山頭火と、なかなかにぎやかである。

しかし、これらはいずれも旅行者の目で捉えられた熊本ではなかったのか。単なる舞台を熊本が提供している

だけで、作者の思想は別のところのものであった。

郷土の文学とは、その土地に土着する思想に支えられて生れ出た文学をこそ本物とは言えよう。だとすると、このような近代日本文学史を彩る絢爛たる「熊本」は借りものでしかないのではなかったのか。

では熊本には本物の郷土文学はなかったのか。徳富兄弟がいた。歌人宗不早がいた。蓮田善明がいた。いずれも熊本の人々が忘れてゐるか、始めから知らない人達かも知れぬ。もつとも多くの「ふるさと」を描いた作家徳永直も本物なるが故にか忘れ去られていた。

いままさに、徳永直のとくに昭和十年代の作品が再評価されようとしているのである。従来の日本近代文学史が、プロレタリア文学系を不当に抹殺してきていたために、このすぐれた郷土出身作家の作品は、郷土においてさえ知らされなかつたのである。

文学碑建立の運動は実に郷土作家徳永直の再発見に直結する運動でもある。文庫本型の「徳永直短篇小説集」の郷土出版の準備も着々と進められている。

(熊本大学教育学部講師)

徳 永 と 私

森 塚 利 徳

徳永直を追い続けてきて四年になる。最初、全く前人未踏の思いで研究をはじめた。それは、これが私の近代

文学、否、研究というものの最初でもあったからであろう。

恩師より「最初の研究は十年かかるよ。」と言われたが、なるほどと思うようにもなれた。やっと、準備運動がおわり、徳永直研究のスタートラインにつけた感じがする。

卒業論文の「後記」に「昨年の夏(昭和48)、私は徳永の次女に当たる津田みちよ氏宅を訪問し、彼の日記を見せて戴いた。この時、初めて私は徳永直に会ったのである。何かガラス細工の人形にでも触れるようにして、その日記を手にした事を私は覚えてゐる。その時の感動が、私に大それた望みを抱かせるようになった。それは徳永直全集の刊行である。」と書いてゐる。今もこの「大それた望み」は失っていない。

徳永直研究と全集刊行、これが私の夢とロマンのようにも思われる。

(徳永直研究者、菊池農養高等学校教諭)

木 下 嵩

数年前に、徳富直花の碑が建てられた。おそきに過ぎたが良いことである。このたび徳永直の碑が計画された。この話を聞いたときにも、すぐ賛成した。

直花は明治時代を、徳永直は大正・昭和を純粋すぎるほど、まじめに生きた人である。徳永直は熊本で生まれて、近代的自覚を始めて体で感じとった人である。

鹿兒島の羊づる、熊本の何とかと言われる。熊本は今でこそそれ程ではないが、もとは出る釘をたたいたり、

足を引張ったりしたものである。

先輩を顕彰して、先輩の余徳を忘れず、これから生きて行く私たちの、生き方の糧としたものである。

(三陽企業株式会社社長)

徳永 直文学碑建立の意義

武 藤 光 磨

全国各県を歩いてみて私の心を喚ぶものは、その地方のもつ優れた景観がいかに魅力的であるか、ということよりも、むしろその風土の中で長い風雪に耐えて育てられた古典から現代にかけての文学や歴史の大きな遺産の重みが、いかに光芒を放って輝やいているかということに加えて、さらにそれを証左するものとしての記念碑が建立されているかということである。

日本近代文学の宝庫である本県には詩碑・歌碑・句碑のたぐいは、かなり多く見られるものの、散文作家の文学碑は、まことに寥々たるもので、熊本市内の小泉八雲・夏目漱石・菊池市内の徳富蘆花・長田幹彦・荒木精之のもの、その他わずか数えるに過ぎない。しかし、今回郷土熊本が生んだ不世出のプロレタリア作家徳永直の文学碑が建立されることになったことは、遅きに失した憾みがあったとは言え、実に意義深く、慶祝の一語に尽きる。

徳永の作品は「馬」(大一一四)から「一つの歴史」(昭三二)まで、越大な数にのぼるが、中でも処女長篇「

太陽のない街」(昭四)と郷土にゆかりのある「最初の記憶」(昭三三)の二篇は現在でも私の心に鮮烈に灼きつかれている。

A 「太陽のない街」は、徳永が大正一一年、二三才の時に上京して博文館印刷所に入り、同一五年争議に破れて職首されるまでの数年間、純粋な労働者の体験に基いて「戦旗」に発表したものであり、作品の内容と価値については、今さらここに改めて説明する必要はあるまい。ただ重要なことは、当時のプロレタリア文学運動の主流は、大学出身の青白いインテリたちによって占められていた中であって、いわゆる「手の黒い」労働者出身の徳永が、日本に満ち溢れている同志の労働者たちに「読ませる」ために書いたことに意義がある。

下積みになって勤らく民衆の惨苦と貧乏のどん底の生活を、さらにその中に流れる人間の真実の叫び声や哀歎の感情の彩りを、きわめてきめの細かい筆致で描写したこの作品は、これまでの日本文学史上に見ようとしても絶対に見られなかったものだけに、徳永は一躍プロレタリア作家として脚光を浴びた。

B 「最初の記憶」は、以前「馬」と題して書いたものを改訂した作品で、短篇集「はたらく一家」の中に収められている。中野重治は、かつて「作家徳永の仕事のなかでもかなり高いものと考えている。」と高く評価したように、全篇の随所に彼の人生観の眼が確実に滲透しており、そこに現実の社会に対する抑えようもない不満と憤怒がほとばしっていることは、作品の冒頭で「私は七歳で小学校に入ったが、その頃はもういっばしの竹細工職人であった。」という述懐の言葉によっても十分に窺われる。

熊本の「朝市場」で母と一緒に「十五人分で一錢五厘の竹箸」を売る極貧の生活。父が日露戦争に出征して貰った一時金百五十円で買った馬を、病氣中の父に代って、小学生の「私」と弟の二人で、ひっぱって熊本市から三里離れた楠木町まで車に生魚を満載して、激しく降る雨の暗い夜道を行く。車輪が泥土に埋没して終り難渋す

る中で、「私」は泣きながら手綱で馬の顔を打った際に、馬の大きな眼玉からも大粒の涙が一ぱい溢れ出てくる。「私」と弟は、いきなり馬の平首にしがみついて泣き出した。——という心を疼かせる場面があるが、これが徳永の最初に味わった労働生活の痛烈で新鮮な記憶である。

作品の最後の個所で徳永は「私たちはもっと労働について語らなければならぬ。労働のもつ内容は、現在語られている多くの恋愛よりも、インテリゲンチヤのある層の悩みよりも、乃至は消費生活の拘束さよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである。」と結んでいる。全生涯、変ることなく眉をあげて労働者としてのプライドを持ち続け、真実一路に徹して生きぬいた徳永直の、まことに颯爽とした、示唆深い滋味拘すべき立言である。

(尚綱大学文学部教授)

徳永 直を熊本で見直す契機に

藤 川 治 水

徳永直は「太陽のない街」などの作品で、全国的に知られているが、その青年期、つまり熊本在任時代の様子は、あまり知られていない。

大正七年に

ズブズブのズボンに手をつき込んで没ち胸

の自由律短歌を持参して、安永信一郎氏に評を乞うたことだから、資本主義社会に疑念の目を向け、定型律短歌をブルジョア趣味だと熊本短歌会に携りこみをかけた小田島良徳、美濃部長行と無縁であったわけではないであろう。

とすれば、小田島、竹中英太郎らの熊本無産者運動、竹中、田代倫、楠本のふえらの熊本水平社創立運動などにいくらかのつながりがあったのではないか？ しかも、この大正中期から末期にかけて、激発する青年たちの運動については、いまだ熊本では整理されていない状態である。たとえば、大正十二年七月十八日の相模館での熊本水平社創立大会がありながら、なぜに正式の創立は菊池市の会まで待たなければならぬのか、等々。

こうした未整理の貴重な事実のなかに、徳永直の青年期時代の活躍も眠っているはずだ。いわば、熊本人にとっての徳永直は 燈台下暗し どおりの認識しかない、といていいようである。

そういう意味で、今回の徳永直文学碑建立運動は、改めて彼と熊本とを見つめ直す重要な契機になると考えられる。

(映画評論家)

徳永 直文学碑建立への願い

緒 方 求 也

文学の歴史は水く古い。世界に残っている最古のものは五千年も前のアッシリアの叙事詩、「ギルガメッシュ」だと言われ、これは砂漠の砂の中から発見されたもので解読され世界各国に紹介された。勿論日本語にも訳され

ている。

徳永直氏の出世作「太陽のない街」はソビエト、ドイツをはじめ世界数ヶ国語に翻訳され、多く読まれているが、日本の文学史上に於ても、小学校のみを終えた一労働者の作品として珍しいケースであり、彼が文中に自分の生活を「その苦しさは、どっちを見ても身のよせ場が無い境遇の私たち夫婦は手とり合って泣くと言うようなこともあった」と言う、その様に失業や貧苦のどん底の中から、この文学作品が生れた事は、大変な出来事であると言われる。自分専ら学生時代にこれを読み、その社会的不均衡の表現は恰もストークスのアンクルトムス・ケビンにも匹敵するものと、一種の感動を覚えたものである。

小林多喜二氏の「蟹工船」と共に昭和初期のプロ文学の代表作とされているが、徳永直逝きて二十年、此度彼の生地はこの文学碑建立が企画される事は当然であり、是非に必要な事と思われる。

碑文「労働は……」の文字こそ人類ある限り、社会ある限り、不変の真理であろう。

数年前、貧苦の放浪生活の中に世を去った放浪の詩人、俳句の宗不卑氏の文学碑が建てられた時に感動を持たれたように、熊本の有識者の皆様の御賛同をお願いし度いと思ふ次第である。

(熊本県文化財保護審議会々長)

徳永 直と私

「あとがき」に代えて

高 光 義 明

もしも、

- 昭和六年の晩夏、徳永直を省線大塚駅近くの家に訪れなかったなら
- 徳永直に、関東消費組合連盟常任に世話して貰っていなかったなら
- 闘消連に入らずに迎えたメーデーの前夜、もうもうたる湯気の中、「団結餅」や「赤飯」を婦人部の応援で、明るい革命歌や労働歌に励げまされて徹夜で作業しなかったなら
- その時の強烈な印象を纏って、「消費組合小説集」七月二日めざして」に応募しなかったなら
- 赤い団結餅」の産方みたいな劇作が、適者である徳永直や江口漢に認められ、日本プロレタリア作家同盟員に推薦されなかったなら
- 作家同盟に入った関係からか、日本消費組合連盟機関紙部員に選ばれる、「消費組合新聞」の編集に携わらなかったなら

○ 資金難で月二回刊が発行出来ず、「第三種」を取消されぬために、柳れぬ鉄筆を握ってガリパンで穴埋めする様な機会が無かったなら

今日の私は、全く違った私であつたらう。

けだし、徳水直との出会いは、私の一生を決定づけた。文学碑建立にいささかでもお役に立たせていただく所
以である。

この冊子に集録された十五人の方は、何れもよびかけ人や繰りのある人々でそれぞれの視点から徳水直の文学
を評価し、文学碑建立のために思い出なり感想を、寸暇を割いて「寄せて」いただいた。

今后、徳水直に格別の感懐をお持ちの方々の寄稿をいただき、(二)と続刊し、文学碑の募金、建立のますます
の「力」に役立てたい。

尚 本冊子表題は熊本日日新聞社社長島田四郎氏の筆になるもの。島田氏の文学碑建立についてのご熱意に対
しこの機会に厚く御礼を申し上げます。

(文学碑をつくる会事務局長担当)